

モラリスト、ロバート・ベラー

島 蘭 進

(昭和49年修士終了)

バークレイに1年滞在し、ロバート・N・ベラー教授にやや親しく接する機会を得た。ベラー教授の近況を紹介して「帰国の弁」にかえることにする。

まず、経済大国日本の貧乏教師の愚痴から始めよう。ベラー教授の授業義務は年間、1講義(学部、週3回1時間ずつ)、1ゼミ(大学院)である。この「1」は半年でおわる。講義もゼミも秋学期なので、春学期は授業義務なしということになる。これだけのゆとりの中で、7、8年がかりで一著を仕上げる。見習いたくても、我々にはやりようがないということか。

さて、1984年秋の場合、講義は「宗教社会学」ゼミは「社会学理論」だったので、私は前者を聴講した。内容はまずシュッツなどを引いて、日常的意識と宗教的意識を対置し、概念的・象徴的・行為的・統合的という4つの宗教意識のレベルを設定する。ついで、宗教進化論の枠組にしたがって諸宗教を説明していく。とくに歴史宗教の解説に力点があった。政治的権威から独立した宗教的権威、およびその自立の基礎となる宗教理念の成立が強調されるのは、最初期以来、教授の宗教社会学を貫く基本的音調だと思う。しかし、近代初期以降の宗教の展開をどう見るかという点では、教授の考え方は以前とは大きく変わってきている。合理主義的個人主義的プロテスタンティズムはもはや宗教の理想とは見なされていない。儀礼という形で伝統をわかちあう人々の共同体こそ信仰の本来の場と考えられている。かつて「無教会」だった教授は、数年前に聖公会に転向された由。「ほんとはカトリックになりたかったのさ」という皮肉っぽい評言を聞いた。今、教授が所属する教会のようすは、新著 Habits of the Heart に描かれている。ちなみに、教授は夏休みのサン・フラン

シスコ禅センターの合宿修行に時折参加されるといふ。禅の最初の手ほどきは柳川先生から受けたと聞いたような気がするが、これは私のヒアリング・ミスであろうか。

講義に対する学生の反応はどうか。たいていの学生には、ちょっととっつきにくかったのではない。出席率も良くなく、良い質問もあまり出なかった。その理由——教授の講義は(著書と同様)、力強いタッチで大枠をデッサンし、聞き手の同意を迫るようなところがある。単純な問いから始め、事実を提示し、対話を通して皆を納得させていくというやり方ではない。時に熟してきて、かのアメリカ風説教ないし政治演説に近づくこともないわけではない。君達はテレビを見すぎだと言われた時や、ルイ・デュモンが大いにもちあげられ、レヴィ=ストロースがひどくけなされた時など、かなりの学生に困惑の表情が浮かんだようだった。

しかし、教授のこうした講義に強く動かされる学生もいるようだ。新著 Habits of the Heart の共著者達をはじめとして、教授に指導を求める優秀な若手学者が少なくない。そのわけはこうだろうか。教授には偉大なもの、気高いものへの情熱を喚起する力がある。教授と話していると、学問が日常の単純労働としてではなく、高い理想に根ざした営みと思えてくるらしい。そこで発憤して、息の長い、力のこもった仕事に取り組むようになる。

もっとも宗教社会学プロパーの弟子となると多くはない。代表格はティプトン (Steven Tipton) で、この人の書いた Getting Saved from the Sixties は各方面から高い評価を受けている。カウンター・カルチャーの3つの宗教集団のメンバーに、道徳論理に焦点を合わせてインタビュー

した調査研究である。60年代の道徳的アナキーの中で途方にくれた若者達が、そこからどのような生き方を見出すに至ったかが描かれている。道徳をめぐる対話が、若者達の自我の核心をえぐり出すものになっている。Habits of the Heartはこの本の方法を受けついで書かれている(ティプトンも共著者の1人)。こちらは現代アメリカ中産階級の大人が何を拠り所として生きているかをテーマとしている。ティプトンの仕事のほか、マッキンタイア(Alasdair MacIntyre)、ハウアース(Stanley Hauerwas)などの思想が下敷にある。共同体を人々とともに荷おうとするモラル・センスの伝統が、個人主義という病をどう克服することができるか、という問題、ふつうの人の日常の言葉によって思想的問題をとらえようとする方法——いずれもひじょうに野心的なもので、ベラー教授がこの本にかけた意気込みはたいへんなもののように見うけられた。

市民宗教論とはどんな関係にあるか。ある書評がこの本をもっぱら市民宗教論の枠組でとらえようとしていたので感想をうかがったところ、Stupid. とのこと。市民宗教の概念はひどい混乱を招いたので、もう使わないと言われる。では教授の現在の思想の中核となる概念は何か。それは1974年のNew Religious Consciousnessで提起された「功利主義」の概念だろうか。「アメリカは功利主義の畏にとらえられている。」ベラー教授のみならず、この本の著者達皆がこの大きな共同作業にとりくんだ情熱の源泉の少なくとも一部は、この観念か

ら育ってきたものであろう。

では、この情熱的モラリスト、ベラー教授にとって現代の日本はどのように見えているか。Tokugawa Religionの新版が刊行されることになり、新しい序文の原稿を拝見することができたので、その論旨を紹介しよう。……丸山真男の批判にもかかわらず、日本の経済発展は初版出版当時の私のオプティミズムを裏ぎることなく実現した。いや、むしろ予測をはるかに超えた成功をとげた。今や日本は世界の中でもっとも効率的に管理された社会であり、模範と見なす人々も少なくない。なるほど倫理的普遍主義は欠如し、個々人の尊厳が十分に尊重されているとはいえない。しかし、それは無理な要求ではなからうか。日本人はそれに満足しているのではなからうか。いやいやそうではない。サラリーマンの生活を例にとってみても、とても満足のいくものとはいえない。伝統的な良き生活は破壊され、前途は不安に満ちている。根本的な問題は、日本人の宗教性が、それ自身の目的をもったものとしてではなく、政治や経済の手段として用いられている点にある。

Tokugawa Religion 自体、宗教を手段としてとらえる方法をとってしまっていた。日本人の宗教性(それは儀礼としての生、人情あふれる舞いとしての生と特徴づけられる)が、日本の社会の目的を真に決定するとはどのようなことだろうか。管理社会を突破するそうした試みが今後の日本に現れるだろう。日本の伝統の中には(石田梅岩をはじめとして)、それを可能にする資源が豊かに貯えられている。以上。